2022年4月24日（日）主日朝礼拝説教

『キリストの手とわき腹』井上隆晶牧師
エゼキエル37章11～14節、ヨハネ20章19～29節

❶【あなたがたに平和があるように】
イエス様が復活した日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけ、身を隠していました。イエス様の次は自分たちが殺されると思っていたからです。朝二人の弟子が墓を見に行ったきり、夕方まで閉じこもっていたのだと思います。そんな恐れと不安でいっぱいであった彼らの家の中にイエス様は入って来られ、その真ん中に立ち「**あなたがたに平和があるように**」と言われました。（19 節）そして彼らに手とわき腹の傷跡を見せると、弟子たちは喜びました。イエス様は再び「**あなたがたに平和があるように**」と言われました。（21 節）最初のは挨拶でしょう。二回目は、恐れなくても良いということを言いたかったのでしょう。「シャローム」（平和）というヘブライ語は、問題から逃げることによって得る平安ではなく、恐れを静めてゆく平安だということを聞いたことがあります。私たちは絶えず世間のことや人間のことで心が揺れ動き、恐れに支配されます。それは心の真ん中にキリストが立っていないからです。そういう恐れから私たちを守って下さるキリストがおられることに気がついていないからです。弟子たちはイエス様を裏切ったわけですから、神はもう自分と共にいて下さらないと思ったでしょう。罪が裁かれる恐れ、死ぬ恐れが彼らを支配していたと思います。でもイエス様が手とわき腹の傷跡を見せて「**平和があるように**」と言われたということは、罪を犯しても恐れなくて良い、神はあなたと共におられますよ、安心しなさい、と言われたかったのだと思います。また、死んでも死なないから死を恐れてはならない、ということも言いたかったのでしょう。イエス様がどんな方か見えてくると恐れはなくなるのです。キリストの平和は、私たちの恐れを静めてくれる平和なのです。

❷【聖霊を受けることは、キリストの仕事を引き継ぐため】
イエス様はこの後「**父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。**」（21 節）といわれ、弟子たちに息を吹きかけ「**聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でもあなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。**」（22～23 節）と言われました。これはヨハネの福音書のペンテコステ（聖霊降臨）と言われている記事です。天地創造の始め、神様は人間の鼻に命の息を吹き入れられました。ここで弟子たちはキリストによって命の息である聖霊を吹き入れられ、キリストの体（教会）に創り変えられたのです。聖霊という油を注がれた者は、キリストの体になります。私たちも小さなキリストなのです。それは教会をイエス様の業を引き継ぐ者としてこの世

に派遣するためです。その仕事の一つは人の罪を解くことです。「**だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でもあなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る**」と言われています。よく福音派の人は「信じたら救われ、信じないと地獄に行きます」といいます。しかしここでは相手は問題ではなく、あなたが赦さなければ赦されないのですから、あなたの問題になります。「赦せ」と教会に命じているのです。ステファノと同じです。自分を迫害する者のために祈る仕事です。人の赦しはあなたにかかっているのです。教会は、神と多くの民を結ぶ祭司、仲介者となったのです。イエス様の務めを引き継ぐということはそういうことでしょう。

●ヘンリ・ナウエンは神父であり、大学の教授をしていましたが、その職を捨ててラルシュ共同体に入り、知的障がいを持った仲間たちと共に生活をし、多くの著書を残しました。彼はまた平和問題にも取り組みましたが、彼はこんなことを書いています。「多くの人が平和活動に対して強く躊躇する理由の一つは、平和活動家自身が求めている平和を、その人たちの中に見いだせないことにあるのです。」自分の願いが満たされない怒りから平和運動をする人が多いというのです。怒りから生まれるのは平和ではなく暴力です。それは相手を脅かす言葉や態度、相手に耳を傾けず、立場や数で押し通す姿で現れます。**ナウエンは、真の平和は祈りによってこそ生じると確信していました。私たち自身がまず、神の愛以外のもので心を満たそうとすることから解放される必要があるのです。**

伝道も平和運動も聖霊の力でするものです。教会員の 0 くんが「祈ることが一番の伝道だ」といいましたが、私もそう思います。祈って聖霊をいただいて、動くのです。

❸【トマスの信仰告白】

さて 12 弟子の一人であるトマスはイエス様が復活した日の夕方、弟子たちと一緒にいなかったのでイエス様に会うことができませんでした。仲間の弟子たちが「**私たちは主を見た**」（25 節）といった時、彼は「**あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手を脇腹に入れてみなければ、私は決して信じない**」（25 節）と言いました。トマスにはディディモ（双子）というあだ名がついています。それは彼の心の中にいる二人の自分「信じる自分」と「信じられない自分」を意味しています。これは私たちも同じです。いつも 100%信じている人は誰もいません。信仰は毎日変化します。だから「**トマスの不信仰**」は本当の不信仰ではありません。その中に信仰が入っている不信仰です。トマスとはあなたなのです。八日の後、弟子たちはまた家の中におりトマスも共にいました。八日の後というのは日曜日のことです。すると再びイエス様は姿を現し、トマスに「**あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい**」（ヨハネ 20：27）と言われました。トマスはすぐに「**私の主、私の神よ**」（同 20：28）

と信仰告白をしました。イエス様はトマスに「**私を見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。**」（ヨハネ 20：29）といわれました。これは後の時代の教会にいわれた言葉でしょう。イエス様を見れた人たちはいいなあ、と思うかもしれませんが、イエス様の奇跡を見てもユダヤ人は信じませんでしたし、復活を見た兵士たちも信じませんでした。信じるというのは人間の力では無理なのです。神からの働きかけが必要です。ここでもそうです。イエス様が現れトマスに語りかけなければ彼は信じられなかったでしょう。信仰は神の業です。私は自分の力で信じたのではないと思っています。この物語はイエス様を信じれるようになるためにはどうしたら良いのかを教えています。イエス様は「**日曜日ごとに現れ**」、「**弟子たちが集まっている所**」に現れて下さいます。つまり教会に、集会に現れるのです。私たちに出来るのは、そこに身を置き続けることだけです。そうすればキリストが語りかけ、触れてくれます。紅海の海で驚くべき神の奇跡を体験したイスラエルの民は賛美の歌を上げましたが、やがてそこを立ち、荒れ野を三日進んでマラに着きました。しかしそこの水が苦くて飲めなかったので「**何を飲んだらよいのか**」（出エジプト 15：24）と不平を言ったとあります。あれほどの経験をしたのにイスラエルの民の信仰は三日しかもちませんでした。マラの苦い水を出す泉とは、人間の心の象徴なのです。そこでモーセは一本の木を泉に投げ込むと水は甘くなったとあります。教父たちはこの木は「十字架」であると言っています。キリストを心の泉に入れない限り、信仰は湧き出てきません。聖書の言葉を聞き続け、聖餐を食べ続けるのです。あなたも甘い水になるでしょう。

●淀川キリスト教病院外科医長を経て、ヴォーリス記念病院ホスピス長をされている細井順医師が癌になり『死を恐れないで生きる』という本を出しました。
「死の前では人間は本当に無力というか、何もできない。…私もあなたと同じ死にゆく人間なんだ。みんな一緒なんだとなる。…自分が全く無力である死というものを意識して、初めて人は本当に生きられるのだと思います。…みんながお互いに弱い存在だと認め合えた時、キリストの平和は訪れるように思います。」「でもその死というのが決して暗くない。…ホスピスで見る死は断絶ではなく命のつながりを感じられるんです。…おかしなことを言うようですが、私はもう自分が生きているか死んでいるか分からないような気がすることがあるんです。実際、死というのが、私の中にない。神が共にいるってことは、生きていようが死んでいようが神様が一緒にいてくれるということだと思うんです。それが全てです。そして、そのことが自分を動かす力になってくれているのです。」

細井医師は「死というのが、私の中にない。」といいましたが、キリストが自分の中におられるので、死を感じないといわれたのです。生死は関係ないのです。キリストが共におられることを感じる人は、命を感じるのです。キリストが共にいるということはこんなにすごいことなのです。これがすべてです。
キリスト教が始まったのは人間の力ではありません。キリストが始められたのです。恐れて隠れていた弟子たちに勇気と信仰を与え、この世に送り出したのはキ

リストでした。これがキリスト教のすごさです。だからマイナスでも恐れることはありません。**キリストさえいたら何かが始まる。落ちるところまで落ちても、トマスのようにキリストに触れたらいいのです。そうしたら信仰が出てくるのです。**恐れと不安の中にキリストが入って来られます。不信仰の中にキリストが入って来られます。恐れを追い出し、信仰を生むためです。死と破壊と絶望のこの世界の中に、今日も復活したキリストはまっすぐ立っておられます。それを忘れてはなりません。命の源流が立っておられます。何かが始まります。